

第2部

青少年長崎平和使節派遣



「平和の灯」事業にて、メッセージを描いたキャンドルと共に

派遣生（敬称略）

今川 絵美理（中学生）

竹元 千和実（中学生）

八尋 有彩（高校生）

島根 あずさ（中学生）

清水 大椰（中学生）

額賀 順也（中学生）

引率者

総務部総務課 野口 武之、尾上 大地

1. 行動日程表

第17回青少年長崎平和使節派遣 令和元年8月8日～10日(2泊3日)

8月8日(木)

時間	行動内容	場所
6:30	集合 JR・京急で羽田空港へ	JR大井町駅中央口
8:15	羽田空港発	羽田空港
10:05	長崎空港着	長崎空港
	リムジンバスで長崎市内へ	大波止バス停
11:50	ホテル着	エスペリアホテル長崎
12:15～	昼食	平和公園近辺
13:10～(13:55)	★青少年ピースフォーラム受付	平和会館ホール
14:00～15:15	★開会行事(被爆体験講話など)	平和会館ホール
15:25～17:15	"★参加型平和学習 (被爆建造物等のフィールドワーク)"	長崎原爆資料館周辺
17:30～18:00	「平和の灯」事業見学	平和公園入口～平和の泉周辺
18:45～	夕食・ホテル着	長崎市内・エスペリアホテル長崎
22:00	就寝	

8月9日(金)

時間	行動内容	場所
7:00	起床	
7:25	朝食	ホテル内レストラン
8:50	ホテル出発	エスペリアホテル長崎
9:20	平和公園着	平和公園
9:30～(9:45)	平和祈念式典開場・受付	平和公園
10:35～11:43	平和祈念式典参列(長崎市実施)	平和公園・平和祈念像前
12:30～	昼食	長崎ブリックホール国際会議場周辺
13:15～(13:25)	★平和学習受付	長崎ブリックホール国際会議場
13:30～15:45	★平和学習	長崎ブリックホール国際会議場
16:10～18:00	自主研修	長崎市内
18:00～	長崎原爆資料館見学	長崎原爆資料館他
19:05～	夕食・ホテル着	長崎市内・エスペリアホテル長崎
22:00	就寝	

8月10日(土)

時間	行動内容	場所
7:00	起床	
7:30	朝食	ホテル内レストラン
9:00	ホテル出発	エスペリアホテル長崎
9:00～14:30	自主研修・市内見学(昼食)	長崎市内
14:30	集合	大波止バス停
	リムジンバスで長崎空港へ	
17:05	長崎空港	長崎空港
18:55	羽田空港着	羽田空港
	JR・京急で大井町駅へ	
20:15	解散	JR大井町駅中央口

★は青少年ピースフォーラム事業(主催:長崎市、運営:公益財団法人長崎平和推進協会)

「青少年ピースフォーラム」とは？

毎年8月9日の平和祈念式典にあわせて、長崎市では、「青少年ピースフォーラム」を平成5年度から開催しています。「青少年ピースフォーラム」は、全国の自治体が派遣する平和使節団の青少年と長崎の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として実施しています。

このフォーラムでは、大学生や高校生などで構成される長崎市の「青少年ピースボランティア」が中心となり、平和学習の進行やフィールドワークの案内などを行っています。

2019年は「品川区青少年長崎平和使節」をはじめ、全国から35団体、約500名もの青少年が参加し、ピースボランティアなどと交流を深めました。

日	時	内 容 〈場 所〉	
1日目 8/8 (木)	14:00 ～15:15	開会行事（被爆体験講話など）〈平和会館ホール〉	
	15:25 ～17:25	【コース別の平和学習】長崎原爆の実相について学びます。	
		Aコース 平和学習 〈平和会館ホール〉 こじんまり フィールドワーク（屋外） 〈原爆資料館周辺〉	Bコース コース別被爆建造物等の フィールドワーク（屋外） 〈原爆資料館周辺〉
18:00 ～19:30	交流会（希望者）〈長崎新聞文化ホール〉		
2日目 8/9 (金)	午前	長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典への参列 〈平和公園ほか〉 もしくは 長崎市内学校での平和集会への参加	
	13:30 ～15:30	【コース別の平和学習】平和について考えます。	
		Aコース 平和学習 〈平和会館ホール〉	Bコース 平和学習 〈長崎ブリックホール国際会議場〉

事前打ち合わせ会

派遣生が平和使節派遣事業の趣旨を理解し、それぞれが目的を持って長崎への派遣に臨めるよう、事前打ち合わせ会を2回実施しました。

打ち合わせ会では、参加者の自己紹介や参加への動機、非核平和都市品川宣言事業および青少年長崎平和使節派遣の目的についての説明、自主研修の検討等を行いました。

また、平和への願いを込めて長崎へ持って行く千羽鶴を全員で作成しました。

〈第1回〉6月25日（火）午後6時～

- ・自己紹介
- ・参加動機の発表
- ・「非核平和都市品川宣言」事業の説明
- ・「青少年長崎平和使節派遣」の目的を説明



〈第2回〉7月19日（金）午後6時～

- ・「平和の折り鶴」受領
- ・自主研修の検討
- ・自主研修計画表の提出
- ・スケジュールの最終確認
- ・ピースフォーラム事業について説明
- ・派遣報告書類の説明

事後報告会

8月21日（水）午前10時～

今回の平和使節派遣を通じて印象に残ったこと、学んだことなどを話し合いました。

また、非核平和都市品川宣言35周年記念式典で行う派遣生による成果発表の内容や発表方法について話し合いました。



- ・派遣の感想、反省発表
- ・成果報告書について
- ・派遣修了証書および青少年ピースフォーラム修了証書授与
- ・非核平和都市品川宣言35周年記念式典での派遣生による成果発表の説明

2. 長崎での主な活動

(1) 青少年ピースフォーラム開会行事（被爆体験講話）

<日 時> 8月8日（木）14：00～15：15
<場 所> 平和会館ホール
<内 容> 開会式は青少年ピースボランティアが司会をつとめました。被爆体験講話では、18歳で当時長崎師範学校在学中のとき、軍需工場へ学徒動員され、爆心地より1.8kmの学校の寮で、当日の夜勤に備え睡眠中に被爆、全身火傷（特に左腕と左足先は重傷）を負われた築城昭平さんのお話を聴講しました。



被爆体験講話 講師の築城昭平さん



オープニング

<八尋 有彩>

被爆体験講話から実際の原爆が落ちた瞬間の想像しがたい光景や様子等を知りました。その後、原爆病がどのように影響したか、原爆の恐ろしさを改めて認識しました。被爆体験者の核抑止への想いを聴き、これからの若い世代が想いを受け継いでいってほしいという言葉が特に印象的でした。

<清水 大椰>

あの原爆を今、ここで被爆したらと考えさせられる経験をしました。家族が亡くなってしまったこと、原爆の大きさを言葉で言い表せない程の威力、胸が痛みました。

<島根 あずさ>

原爆が落下した中心地に近かった時とは「人間なのか」と疑うほどに、一瞬にして灰になったり、真っ黒に焦げてしまったとお聞きしました。これ以上怖いことはありません。

(2) 被爆建造物等のフィールドワーク

<日 時> 8月8日(木) 15:25～17:15

<場 所> 原爆資料館周辺(浦上天主堂コース)

<内 容> 浦上天主堂や原爆落下中心地碑などを青少年ピースボランティアと一緒に見学し、被爆の実相を学習しました。



浦上天主堂



原爆落下中心地碑



下の川



平和公園祈りのゾーン 爆心地公園(被爆当時の地層)

<竹元 千和実>

浦上天主堂の鐘が吹き飛ばされ、レンガの壁もずれてしまう原爆の威力の強さがとても印象的でした。また原爆当時の地層には、当時の人々が使っていた日用品(食器や工具など)が残っており、溶けてくっついてしまったりしていて、原爆の強さがより分かりました。

<八尋 有彩>

浦上天主堂では一見あまり被爆跡は見られませんでした。マリア像・ヨハネ像などの焦げた跡や欠けている部分から原爆の威力を感じました。その他にも鐘楼ドームや遺壁などから爆風が建物へ及ぼした影響を目にすることが出来ました。今回案内してくれた青少年ピースボランティアの方の「現在の長崎の街はこのような跡や遺跡の元に出来ている」という言葉が心に残りました。

(3) 平和祈念式典

<日 時> 8月9日(金) 10:35～11:45

<場 所> 平和公園内平和祈念像前広場

<内 容> 被爆74周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列し、原爆が投下された11時2分には、一斉に黙とうを捧げました。



平和の泉で千羽鶴を捧げる



11時2分黙とうを捧げる



式典の様子

<額賀 順也>

黙とうの時に、今までに感じたことの無い雰囲気を感じました。多くの日本人が黙とうを行っている中で、横に居た外国人の方も黙とうを行っており、国内外を問わず、平和に対する想いは皆同じなんだと思いました。

<今川 絵美理>

被爆者代表の山脇佳朗さんの平和への誓い(P 73に記載)から、私は「原爆」とは一度でも使用してはならない、また原爆というのを次の世代に伝えていかなければいけないものだという事を改めて身に染みて感じました。

<清水 大椰>

一番印象に残っているのは、「長崎が最後の原爆の地」とおっしゃっていたことです。絶対に二度と原爆を落とさないという気持ちが伝わりました。

(4) 平和学習（意見交換）

<日 時> 8月9日（金）13：30～15：45

<場 所> 長崎ブリックホール国際会議場

<内 容> 「平和、自分たちの未来について考えます！」をテーマに、グループに分かれて、平和な世界にするために、自身が何をできるかを考え、意見交換を行いました。



ピースボランティアを交え、グループごとの意見交換



グループで協力しピースアート（一人ひとりが「平和」のために出来ることを記入）を作る

<島根 あずさ>

とても緊張した中、話したことがない全国の青少年と話し合い、自身の意見を言うことができましたが、平和な世の中になるには遠いという現実にとても悲しくなりました。平和な世の中にするには、私自身はもちろん世界の一人ひとりが変わらなければなりません。だから私は、多くの人にこの事を伝えたいと思いました。

<今川 絵美理>

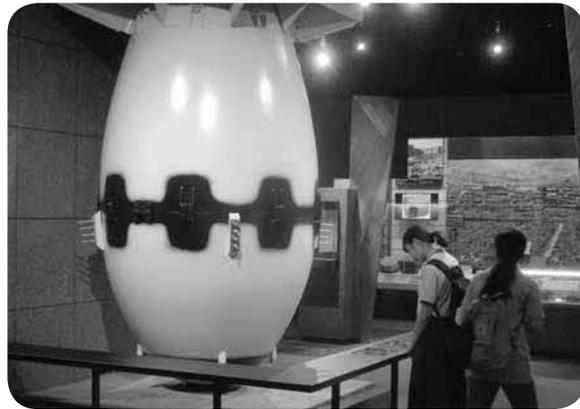
みんな笑顔で意見交換を行い、親睦を深められる良い場でした。平和について一人ひとり考えていることが違って、自分では気付かなかったことに気付き、学びました。

(5) 長崎原爆資料館見学

<日 時> 8月9日(金) 18:00～19:00

<場 所> 長崎原爆資料館

<内 容> 被爆資料や被爆の惨状を示す写真などの展示物を見学し、「当時の被害状況」や「核実験の放射能」などを学ぶことで、派遣生一人ひとりが戦争の悲惨さを感じ取り、平和に対する意識を改めて強く持ちました。



館内の資料等を見学する派遣生たち

<額賀 順也>

ガラスケースの中にあつた「人の身体から出てきたガラス片」があるのに驚き、その大きさに再度驚きました。3cm × 3cm × 1cm 程の大きなガラス片が身体の中に入っていたらと思うとゾッとしました。

<竹元 千和実>

実際に被爆者の方が被爆当時に身に着けていた服や溶けてくっついてしまった日用品、真っ黒に焦げた弁当箱に入っていたお米など、様々な遺物が展示されてました。改めて原爆の酷さを感じました。

(6) 自主研修・市内見学

<日 時> 8月 9日(金) 16:10～18:00

10日(土) 9:00～14:30

<場 所> 長崎市内各所

<内 容> あらかじめ計画を立て、ピースフォーラムでは行けなかった被爆関連施設のほか、市内の名所などを巡り、長崎の地理・歴史についても学びました。



山里小学校 資料館



山里小学校 防空壕跡



永井隆記念館



グラバー園



眼鏡橋



長崎新地中華街

<今川 絵美理 (中学生) >

永井博士の名言に心が動かされ、とても頭に残るようなものばかりでした。永井博士が亡くなるまで平和への思いを本に書き続けていたのを見て、永井博士は私達に「平和や原爆の事を語り継いでいって下さい」と訴えているようでした。山里小学校では北側の奇跡的に残った階段を見て、コンクリートまでもがこのような状況になってしまうのだと息のみました (9日)

グラバー園では日本と違った洋風の家が多く見られた。出島では出島の日々の日常をアニメのようなもので見る事が出来た。(10日)

<竹元 千和実 (中学生) >

如己堂では、自らも白血病などと闘い、被爆し大怪我を負っても被爆者の治療をしていた医師、永井隆博士の事についての展示を見て、平和の尊さを学びました (9日)

戦争から復興して立派な大都市になった長崎の人々の力を感じました。グラバー園は日本の明治初期からの貿易、出島では鎖国当時の出島について学びました (10日)

<八尋 有彩 (高校生) >

山里小学校では防空壕を見る事が出来、当時私より小さい子ども達がどんな思いで生活していたか考えると胸が痛かったです。永井隆記念館では、様々な名言や彼の人生について学び、原爆が落とされた後も人々に希望を与えたことが良くわかりました。色んな立場から見た戦争を知ることが出来ました。(9日)

大浦天主堂や出島、グラバー園などに訪れ、長崎とキリスト教の関係や外国との係りを知ることが出来ました。歴史的景観が現在の長崎に残っているのがとても印象的で日本らしさと西洋の雰囲気が融合しているところに魅力を感じました。(10日)

<島根 あずさ (中学生) >

初めて防空壕を見ました。防空壕の中はとても狭くて暗く、この中で身を守っていたかと思うと怖いです。しかもこんなもので守れるのだろうか疑問をいただきました。(9日)

多くの場所を回りました。眼鏡橋では、ハートの石を探すのに夢中になってしまい、川に落ちそうで怖かったです。中華街はとても派手な雰囲気と店構えはとても印象的でした。長崎を堪能できてよかったです。(10日)

<清水 大椰 (中学生) >

山里小学校では今では絶対のない防空壕があつたりと、昔の物ものしさがありました。永井隆さんは多くの人の命を救い、一番印象的でした。(9日)

グラバー園や、中華街など、活気があり、それと共に、自然豊かで美しい街でした。そんな所に原爆が投下されたかと思うと、胸が痛みます。(10日)

<額賀 順也 (中学生) >

永井隆記念館に行ったときに、自身が被爆しても、他の人を助けようとする永井博士にすごく感動しました。私はただ助けてほしいと頼んでいるだけだと思うので、永井博士の行動力に感心しました (9日)

長崎の沢山の名所をまわりました。グラバー園や眼鏡橋ではハートの石を見つけることが出来ました。また中華街では美味しい料理を食べることが出来ました (10日)



3. 成果報告書

人々の思い

今川 絵美理

言葉が出なかった、原爆資料館で見た被爆者の写真を見て。みなさんは「原爆」という言葉を聞いたらどんなことを想像しますか。多くの方は「悲惨」、「何もかもが無くなってしまう」、というようなことを想像すると思います。まさに、その通りだと思います。「原爆」にいいことなど一つもないのです。

私は、小学校のときに広島での原爆についての話を聞いたことがあります。長崎の原爆についてはあまり知りませんでした。しかし、姉が学校の修学旅行で長崎を訪れ、私はその話を聴き、平和公園の「平和祈念像」を見て「あの指は何を意味しているのだろう」と興味を持ち原爆についてもっと知りたいと思い、今回の「長崎平和使節派遣」に参加しました。

一番印象に残ったのは、ピースフォーラムでのフィールドワークです。訪れたなかで「鐘桜ドーム」と「被爆当時の地層」が特に印象に残りました。「鐘桜ドーム」は浦上天主堂の左の塔にあったものでした。しかし、爆風で天主堂から離れたところまで崩れ落ちてきました。これを見て、こんなに大きくて、いかにも重そうなものがこんなところまで飛ばされるなんてと、爆風の恐ろしさを目の当たりにしました。また、被爆当時の地層では、お茶わん、ハサミなどの日用品ばかりが埋まっていました。それに、ピースボランティアの方に、「この中には人骨も埋まっていたと思う。そして、今この上に平和公園があり、私が歩いている。」と言われドキッとしました。その後、平和公園を通ったときに一步一步がとても重く感じました。また、原爆資料館では当時の様子を再現した部屋や原爆投下時刻で止まった時計、手の骨がくっついたガラス、被爆者の写真など、見る度に言葉で表せないくらい胸が痛み、そういうものを見て「原爆を伝えなきゃ」という思いから、「伝えたいという思いに変わりました。長崎市では毎月9日の日には

原爆についての色々な事が行われています。しかし、東京などの原爆が投下されていない地域では毎月9日にそういった事はありません。その実態を知って驚きました。みんな原爆については知っているけれど、普段は考えていないと思います。実際、私もそうでした。しかし、私は毎月6日、9日に全国、いや世界で「平和の尊さ」や「原爆」についての学習または、祈りをするべきだと思います。なぜならそうすれば、世界中の人達に原爆の恐ろしさや平和の尊さなどが伝わり「原爆」が忘れられることはないと思うからです。長崎に原爆が落とされた理由は空襲の被害をあまり受けていなかったことや兵器製作工場が集まっていたことからなどの理由が考えられていますが、「戦争」というものが起きなければ長崎や広島に原爆は落とされなかったのでは、と私は思います。誰もそう思わなかったのだろうかと思いましたが、それとも生きていくためには仕方なかったのでしょうか。そんなとき、永井隆さんの言葉が頭に浮かびました。「お互いに許し合おう、お互いに不完全な人間なのだから、お互いに愛し合おう、お互いにさみしい人間なのだから。けんかにせよ、後に残るものは後悔だけなのだから」。私もそう思います。人はロボットではないので間違いを起こしてしまうことがあります。実際に私もありました。でも、それをずっと引きずって誰かを責め続けたりするのはよくないと思います。当たり前のようなことですが、今の世の中はそれが出来ていないから「争い」や「いじめ」があるのだと思います。それをなくすためには、周りには自分と気の合う性格の人だけではないということを理解し自己主張だけをやるのではなく相手の意見を尊重し、理解してお互いの意見を分かち合うことが大切だと思います。これが出来れば自分の成長に繋がると思うので、特に学校生活に生かしていきたいです。

当たり前の大切さ

竹元 千和実

1945年8月9日午前11時2分。原子爆弾ファットマンが長崎市の上空にて爆発した。約7万4000

人も尊い市民の命が奪われた。街はほとんど破壊され、生き残った人も原爆の後遺症に苦しんだ。

長崎に行く前もこのようなことが起こった事はもちろん知っていた。しかし、実際直接体験したわけでもなく、同じ時代に生きたわけでもなく、正直昔の出来事で自分には関係のないことだと思っていた。しかし、直接被爆者の方のお話を聞いたり、長崎の同年代の人と話したり、原爆の遺跡を見たりするうちにそのような思いは消えていった。

私は被爆者の築城さんという方のお話を聞き、原子爆弾の恐ろしさを知った。築城さんは投下当時夜勤明けで仮眠中だったそうだ。当時はいつ空襲が来るかわからず、布団を頭からかぶり寝ている間も少しでも防ごうとしていたそうだ。そのことが幸運だった。毛布のおかげで直接爆風を受けず生き残ることができた。しかし布団からでていた所は重傷だったそうだ。それらの、またその他にも沢山の奇跡が起こり自分は今ここにいるとおっしゃっていたことが印象的だった。決して戦争で奪われる命があってはならない。原爆により、当たり前前の日常が一瞬で奪われてしまうという恐ろしさを感じることができた。

また、原爆資料館を見学した際、実際の被爆者の写真の中に、黒こげになった子どもの写真があった。白黒写真でも思わず目を背けたくなるような状況がそこには写っていた。今の日本では黒焦げの死体など普段見ることなどないだろう。しかし投下の後の長崎にはそのようなものがたくさんあり、また、皮膚のただれた人も大勢いて、生きている人は水を欲しがり、「苦しい」「痛い」「水が欲しい」などの声が地響きのようになり、まるで生き地獄のようだったそうだ。それを見てショックを受けない人などいないに違いない。原爆は外の体の傷だけではなく、たくさんの身近な人の安否がわからないつらさ、もしくは亡くしたつらさ、生き地獄を目にしたことなどの内側の傷まで多くの人に負わせてしまう。原爆の傷つけてしまうものの大きさがよくわかった。

さらに、自主研修で行った如己堂では、自身も重傷を負いながらも被爆者の手当てを行った永井隆博士の人生を知ることができた。永井隆博士と

は、放射能の専門家でカトリック教徒の医師である。

彼は放射能の専門家だったため、米国のまいたビラで原子爆弾だったと知ると顔が真っ青になったそうだ。如己堂とは、晩年永井博士がくらした二畳一間の家で、新約聖書のマルコによる福音書12章31節にある「己の如く人を愛せよ」という言葉から名付けられ、とても大切にしていた言葉だった。彼はその言葉通り自身も重傷を負いながらも手当を行ったため、一時昏睡状態にも陥った。その後は如己堂で生活をし、数々の著作を残した。私は永井博士の生きざまに驚いた。43歳という若さで亡くなったがとても中身の濃い人生で、中でも被爆者の手当てしたことはよほど意志の強い人でないと成し得なかっただろう。私も「己の如く人を愛せよ」という言葉を実行できるような大人になりたい。そして永井博士のように人を助けられるようになりたいという夢ができた。

長崎に原爆投下。その事実は知っている人は多いだろう。しかし、その事実を他人事だと思っている人も少なくないだろう。「ナガサキ」「ヒロシマ」をもっと身近な出来事として考えられる人がもっと増えていけば、非核、平和へぐんと近づいていくと私は思う。

そのため、これから長崎へ行き、それらを肌で感じる事ができたという貴重な経験を他の人にも積極的に伝えていこうと思う。この文章で「当たり前」や、「普段」という言葉を数回使ったが、その「当たり前」が当たり前でなくしてしまい、「普段」の日常を壊してしまうのが戦争だ。原子爆弾はそれらを一瞬で奪ってしまう武器だ。それらはあるべきではない。無くなるべきなのだ。しかし、この世界にはまだ戦争がある。いつか世界から戦争がなくなり、世界中の人が「当たり前」のことが「当たり前」だとおもえるような平和で幸せな世界になって欲しい。

現代の姿と歴史的観点から長崎の平和を考える

八尋 有彩

時計の針は、11時2分を刻み、歪んだ姿で残されていた。

1945年8月9日11時2分、長崎へ原爆が投下された。地面の温度は、3000~4000度に達したとされ、一瞬にして全てを炭へと変貌させてしまった。計18万6800人（2019年8月9日時点）の被爆死者を出し、多くの建物が全焼、全半壊するなど甚大な被害を長崎にもたらした。私はこの夏、長崎へ訪問し、テレビや教科書では知ることのできなかった長崎の姿を目の当たりにした。本報告書では、「長崎の平和」について現代の長崎の姿と歴史的観点の2つの異なる視点から考えていきたい。

まず、3日間の学習で私たちは、平和学習・市内研修の2つを行った。まず、平和学習では、築城昭平さんによる講演や、被爆建造物見学、原爆資料館、山里小学校などに訪問した。異なる立場から原爆、原爆との向き合い方を知ることができた。中でも、永井隆さんの病気を患いながら、人々を勇気づけ、多くの作品を通じメッセージを発信する姿は強く印象に残った。被爆建造物の見学では、原爆によって溶けてしまったマリア像や、ヨハネ像、そして数cm建物にズレがおきた元の浦上天主堂などを見ることができた。実際に原爆の被害が現在の長崎にも残されており、現代の発展した長崎の街を感じたと共に、今もなお残る原爆の恐ろしさを身近に感じた。築城昭平さんによる講演では、原爆当日の体験や、その後の生活について話を伺うことができた。「被爆者でない人も被爆者の思いを受け継いでいる」という築城さんの言葉は自分の中で強く残り、私たちの世代にできることは一体何なのか、考えるきっかけとなった。

続いて3日目には、大浦天主堂や、グラバー園、出島、中華街などへ訪れ市内研修を行った。平和学習では、長崎と原爆について深く掘り下げたが、市内研修では、長崎の歩んできた歴史について理解を深めることができた。外国の文化が今も根強く残る長崎だが、西洋らしさを持つことになったきっかけや、国際的な発展を遂げるまでの経緯について知ることができた。大浦天主堂では、キリスト教との関係性や、出島では、江戸幕末や明治時代の長崎での国際交流を知ることができた。

1、2日目とは異なった視点から長崎を学ぶことができ、現代の長崎の町並みにフォーカスすることができた。実際に歴史の授業で扱った場所に訪れ、より当時の様子をリアルに感じられた。「平和」がもたらされるまでにどのような葛藤や苦労があったのか考えることができた。

今回の研修において、「平和」を考える最も良い機会となったこととして意見交換会が挙げられる。実際に日本各地から集まった同世代の人々と「世界の状況」や、「平和とは?」、「平和のために取り組んでいる人・活動」について話し合いを行った。意見交換を通じ、私自身の考えを発信できたと共に、他者の意見を聞き、視野を広げることができた。「今は平和と言えるか?」という問いでは、平和という言葉の定義付けや、世界における紛争や餓死の問題を持ち出している人がおり、自分が今まで目を向けてこなかった問題などを再確認することができた。また、同世代の長崎のピースボランティアのスタッフの方と話す機会があり、始めたきっかけとして「原爆について少しでも知ってもらいたい」ということを言っていた。普段、生活している上で「平和」について深く考えることはあまりない。そのため、同世代の平和の意識にとってもインスピレーションを受けたと共に、自分なりの方法で発信することの重要性を感じた。

長崎での3日間の研修を通じ、私は現代の長崎に残る平和への願いを様々な場所や人々から感じた。平和学習では、実際に被爆建造物や遺品などを見て、被爆された一人一人の人の人生について知ることができ、原爆自体の恐ろしさや悲惨さも改めて深く知ることができた。そして、市内研修では、長崎に残る西洋と和の融合した雰囲気を感じ、どのように異文化を取り入れ、変化を遂げてきたのか考えることができた。現在の長崎は、原爆を忘れず、乗り越え、様々な異文化理解を経た上で成り立っているように思う。長崎で学んだ「平和」への取り組みを私たちの世代が伝承していけるよう今後生活していきたい。その第一歩として日々の日常に感謝し、家族や周りの人々への感謝も忘れないようにしていきたい。

平和使節派遣レポート

島根 あずさ

私がこの青少年長崎平和使節派遣で1番印象に残ったのは、原爆資料館です。原爆資料館には、11時2分で止まっている時計がありました。その時計はまるで、原爆投下前の長崎が一瞬で破壊されたことを意味しているようでした。熱風で頭蓋骨が溶けて付着したヘルメットや、本当に人間なのか疑ってしまうほど真っ黒に焦げた人の写真や肌がひどくただれ、火傷を負った人の写真、熱風で溶けて変形したビンや皿、鍋・・・考えても想像できないほど、戦争や原爆の恐ろしさを物語るものがたくさん展示されていました。すごく恐ろしい物や写真はたくさんありましたが、展示されている物一つ一つの声を聴きながら、見ることができたのでよかったと思います。

次に印象に残ったことは、私達に被爆体験講話をしてくださった、築城昭平さんのお話です。ここで、築城さんの被爆体験をお話します。当時18歳だった築城さんは、正義の戦争なんて絶対に無いのに、『日本は正義の戦争をしているんだ』と教えられていました。そのため日本のためと、一生懸命に長崎の工場で働いていました。築城さんは今頑張っているだけで好きだけ勉強ができる、そう思っていました。1945年8月9日11時2分、原子爆弾が投下されました。中心地から約1.8kmの寮で、寝ていました。寝る時には、空襲が寝ている間に来て、爆弾が落ちて破片が飛んで来ると危ないからと、頭まで布団をかぶっていました。そのため、助かることはできませんでしたが、頭から足まで全身大火傷を負ってしまいました。外には脳みそも内臓も吹き飛んでしまっている方もいたそうです。築城さんは、『その恐ろしさや苦しさは思い出したくない最悪の思い出だ』、『長崎が1番最後の被爆地になってほしい』と話しました。長崎に投下された原子爆弾(ファットマン)は最初、福島県小倉市に投下される予定でした。しかし、前日に空襲を受けた隣の市の大火災の煙が小倉市を覆い、投下目標を確認できま

せんでした。だから、次の候補だった長崎県長崎市に投下されたのです。広島・長崎(・福岡)に投下された理由は、あまり空襲を受けていなくて、工場や人口の多い場所だったからです。そのため、日本に影響をもたらすには最適だったのです。案の定、広島からは約14万人、長崎からは約7万4,000人ものが死者がでました。もし助かっても、白血病や放射線障害などといった原爆症を引き起こして、苦しみ亡くなる方も少なくありません。原爆ほど怖いものはないのです。

平和祈念式典では、1日目に聴いた築城さんのお話の内容や長崎市長のお話、被爆者代表山脇さんのお話・・・たくさんのお話を思い巡らせながら参列させていただきました。私は市長の「原爆は人の手によってつくられ、人の上に落とされました。だからこそ、人の意志によって無くすことができます」という言葉がとても心に残りました。何度聴いても心に突き刺さります。この思いこそ1人1人が持っていなければならないと思います。私はこれから死ぬまで、この思いは忘れることはないでしょう。そして、私がこの青少年長崎平和使節派遣で学んだことは、原爆の恐ろしさだけでなく、命の大切さです。私は誰のために生きているのか分からない時がありました。でも今は、自分のためだけでなく、生きたくても生きられなかった戦争時代の人達、爆死してしまった方々のためにも心の底から、どんな高い壁があっても生きたいと思います。そして、私は被爆者の死を無駄にしないために、できるだけ多くの人に原爆の恐ろしさを伝えます。1人1人が理解してくれれば、平和な世界をつくりあげることができます。今、世界がまずやらなければならないことは、核を無くすこと、原爆の恐ろしさを知ることです。私はこれからずっと戦争・原爆の恐ろしさを心に刻み続けていきます。

本当の平和とは

清水 大椰

私は、この長崎の派遣で行く前に目標としたことがあります。

それは、被爆された人々とその遺族の思いを感じ取り、二度とこのような痛ましい出来事が起こさないように自分なりの思いをたくさんの人に伝えていくことです。

まず、長崎に着いた日、まさかこんなところに原爆が投下されたのかと面影が全くありませんでした。何故なら、今は世界三大夜景の一つで観光スポットなど、自然も豊かであるからです。しかし、原爆は本当に投下されてしまいました。

1945年8月9日、午前11時2分に。

当時、上空500mから投下された原爆は、一瞬にしてさら地になりました。原爆は爆風、熱線、放射線のエネルギーを持っています。このエネルギーで一番怖いのは放射線ではないかと思えます。爆風や熱線の威力もとても大きかったと思えますが、放射線は障害物までも突き抜ける程の力があります。今でも多くの方が放射線によって亡くなっています。

このように原爆は一瞬で人々の人生や夢や希望を破壊してしまう、決して手を出してはいけない武器なのです。

まず1日目に、浦上天主堂に行きました。ここでは、入り口にあるマリア像とヨハネ像があります。この二つの像はそれぞれ、爆風で欠けたり、色が黒に変色しています。また、浦上天主堂のすぐ近くにある鐘楼ドームとよばれるものでは、浦上天主堂の塔が崩れ落ちています。更に、浦上天主堂遺壁という建物では風の力によって壁がずれてしまっています。このようなところから、原子爆弾の威力が伝わると思えます。原子爆弾が投下された直後の地面の温度は約3000°から4000°と言われ、想像を遙かに超えるほど、とてつもなく熱いです。

2日目は、主に平和祈念式典に参列しました。私が式典で、一番感動した言葉を見つけました。それは「長崎を最後の原爆地にすること」と言っていたところです。この短い言葉には、「もう二度と戦争を起こさない」ということがよく伝わりました。午後に行った意見交換会には、「平和とは何か」など、正解はない問いについて話し合いました。私は、「核がない世界が本当の平和なのではないか?!」と感じました。また、私が、一番印象に残っているのは、木が真っ直ぐ立っている写真

です。普通は爆風によって倒れますが、なぜまっすぐ立っているのでしょうか？これは、原子爆弾が投下された場所が真下だったからです。かなり衝撃を受けました。長崎に派遣で行ってみて、一番感動したことは、長崎が少しずつ平和を取り戻している事です。平和式典では、多くの歌が歌われ、とても感動しました。平和式典が行われた目の前の「平和の泉」では、74年前に原爆で喉が渇き、亡くなってしまう人もいて、その為に、「平和の泉」という石碑があります。平和記念像は、右手は天に、左手は横に伸ばしています。この意味は、右手は原爆の脅威を、左手は平和を示し、軽く閉じた瞼は、犠牲者の冥福を祈っています。また、長崎市には、各所に折鶴が飾られています。

このように長崎では、平和への復興を目指しているのが、実際に目で見て耳で聞いて分かりました。今では、約13880の核が世界で保有されています。また、過去最大の威力を持っている核は長崎に落とされて約2400倍もの威力が、核実験場で使用されました。果たしてこれが平和なのでしょうか？私にとっての平和は、核のない安全安心の世界のことだと思います。その為に、世界の場で原爆の威力を、発信していくべきだと思います。

私は、世界に発信していくことは、無理かもしれませんが、原爆の威力を身近な人に伝えていくべき義務があると思えます。

長崎平和使節派遣レポート

額賀 順也

1945年8月6日午前8時15分、3日後の8月9日午前11時2分に、それぞれ一発ずつの原子爆弾が広島と長崎に投下されました。それにより、広島では約14万人の人々が、長崎では約15万人の人々が亡くなりました。その後放射能の被害により後遺症が残り、今なお病気に苦しんでいる人達がいいます。

私が今回長崎平和使節派遣に応募したきっかけは、昨年の夏休みに原子爆弾についてのテレビの特集を見たことです。それ以来、原子爆弾はどんな兵器よりも危険で、世の中にあってはいけない

ものだと考えました。このことを友達や家族に伝えていこうと思ったのですが、自分には学校の教科書に書いてあるくらいの薄い知識しかなかったため、現地へ行くことで自分の目や耳で沢山の事を吸収できると思い応募しました。

私は、初日に被爆者である築城さんの講話を聞きました。築城さんは当時18歳で爆心地から1.8kmの軍需工場で働いていました。その日は夜勤だったため仮眠を取っていました。そして原爆が落とされ被爆しました。布団をかぶっていたけれど、それでも全身火傷をし、特に左腕と左足先に重傷を負いました。外にでてみると変な臭いとシーンとした静けさがあったそうです。築城さんはその後10km先の隣町の病院まで5～6時間かけてたどり着き治療してもらい、一命をとりとめたそうです。

次にフィールドワークとして浦上天主堂やその遺壁を見に行きました。そこではレンガの壁が原爆による爆風だけでいとも簡単に約3cm近くずれてしまっていました。また、天主堂自体は新しく建て直されていましたが 中にあるマリア像の手先が欠けていたりするのを見て、原爆の威力を身に染みて感じ取ることができました。この天主堂は30年かけて作られたそうですが、たった一発の原子爆弾で一瞬にして壊されてしまったと考えると、それはあってはいけないことだとつくづく感じました。

2日目は長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列しました。会場内には日本人の他に多くの外国人の方が見受けられ、世界中の人々が核のない平和な世界を望んでいるのだなと思いました。しばらくすると、式典が始まり被爆者代表による「平和の誓い」の中で、安倍総理大臣に核廃絶を訴える場面がありました。それには最後の被爆地を長崎にしたいという市民の強い願いと意思が感じられました。

また、今の日本は、「日本の平和は核の傘下にあるからだ」と言って核兵器禁止条約に署名しない立場をとっています。大人たちの色々な事情は分からないけれど核兵器による戦争は二度と起こしてはいけないし、それを皆一人一人が世界中で共有することがとても大切なことだと思います。

式典後、原爆資料館へ行きました。その中で

最も印象に残っているのは、外国人被爆者へのインタビューの動画でした。ある被爆したオーストラリア人の方（捕虜収容所にて被爆）「原爆投下がなければ日本はまだ戦争をしていただろう」と言っていました。私はとても驚きました。なぜなら、同じ被爆者なら誰でも原爆のない世界が良いと考えていると思ったからです。立場が違うと考え方も変わってくるのだなと思いました。

次に全国から集まった学生達と平和について意見交換をしました。皆色々な意見が出ました。そして今も地球のなかでは戦争が絶えません。僕は世界が少しでも平和になれば良いなと思います。「平和とは何か」これはとても難しい問題です。辞書には「穏やかで変わりのないこと。戦争がなくて、世が安穏であること」とあります。僕はお互いの事を分かり合う事、許すことだと思います。例えば友人と友人が喧嘩をしていたとします。その時に殴り合いの喧嘩になってしまったらそれは戦争と同じです。しかし、その前の段階でお互いの言い分を聞き合い、話し合いで仲直りができたら良いと思います。僕はこのような小さな事からでも少しずつ始めてみようと思います。

最後に長崎平和使節派遣に参加させていただいて、平和や核兵器などについて深く考えることができて、とてもよかったです。本当にありがとうございました。



4. 派遣をふり返って（感想）



今川 絵美理

長崎の原爆がどんなに酷いものだったのかをより詳しく知ることが出来ました。また永井隆博士は、自分も大変なのに他の人のために治療をしていて、とても感銘を受けました。原子爆弾・戦争は「あたり前」をあたり前で失くしてしまう、多くの人々の未来を奪ってしまう恐ろしい武器で、これらを使わせないためにも、戦争は絶対にするべきことではないと思いました。



八尋 有彩

最初、区役所で話し合いを何回かしましたが、みんなあまりしゃべらなくてどうなるかと思っていましたが、日が重なっていくうちに仲良くなれ良かったです。

原爆に関しては、色々な意見があり、当時長崎で収容されていたアラン・チックさんは被爆したのにも関わらず原爆に賛成だと言っていました。でも、アランさんは日本兵からの虐待などを受けていました。そのため私は、戦争そのものが起きなければ「原爆」というものは出来なかったのではないかと思いました。



竹元 千和実

長崎での3日間を通じ、今まで知っていた長崎の原爆に関する知識を深められただけでなく、色んな視点から学ぶことが出来ました。また現在の長崎が原爆を乗り越え、伝え続けながらあることを実感できました。自分にできることや、考えるべきことを見つめ直すとても良い経験になりました。

私はこの派遣で何度も何度も戦争の怖さ、恐ろしさ、悲惨さ、平和の大切さを学びました。そして、この戦争の怖さをつたえなければならないと思いました。理由は戦争について軽く思っている人が居るからです。そして犠牲になってしまった人々の命を無駄にはならないからです。平和の大切さ、この生活のありがたさ、戦争を二度と起こしてはならないということを一生涯に刻みたいと思います。



島根 あずさ



清水 大椰

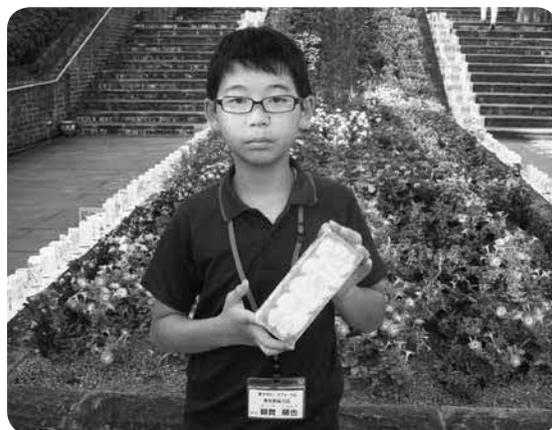
74年前、原爆が投下され人々の夢や希望を、また、街の美しさが一瞬で破壊されてしまいました。

しかし、現在では、外国人や原爆の被害に関わっていない人も、平和式典に参列していて、少しずつ平和が取り戻されていると、実感しました。私も、この経験を実際に、人に伝えていきたいです。

被爆者の話が印象に残りました。都筑さんの話を聴き、平和についての気持ちが大きくなったところで、キャンドルを作ったので良いものが作れました(8日)

原爆資料館で色々な展示物を見て、今の平和な状態を残していけないといけないと思いました(9日)

グラバー園や大浦天主堂など、世界遺産に登録されている建造物等を見学し、長崎を様々な点で学ぶことが出来ました(10日)



額賀 順也